

ショートレポート

メディア情報リテラシーのパフォーマンス評価の開発

飯尾 健¹・溝口 侑¹・香西 佳美¹・大森 俊典¹・
渡邊 智也¹・平山 朋子²・小山 理子³・松下 佳代⁴

(¹ 京都大学大学院教育学研究科・² 藍野大学医療保健学部・
³ 京都光華女子大学短期大学部・⁴ 京都大学高等教育研究開発推進センター)

Short Report

Development of Performance Assessment of Media and Information Literacy

Ken Iio¹, Yu Mizoguchi¹, Yoshimi Kozai¹, Shunsuke Omori¹,
Tomoya Watanabe¹, Tomoko Hirayama², Ayako Koyama³ and Kayo Matsushita⁴

(¹ Graduate School of Education, Kyoto University, ² Faculty of Nursing and Rehabilitation, Aino University,
³ Kyoto Koka Women's College, ⁴ Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University)

本研究では、今後のメディア情報リテラシー（MIL）の評価に向けた示唆を得るため、MIL のパフォーマンス評価の開発と大学生への実践を行った。提示された状況において自分が取る行動とその理由を自由記述する形式の課題および評価用ルーブリックを開発し、大学生に実施した結果、ほとんどの解答がレベル 1 に集中したほか、評価不可能な解答も目立った。その要因として、状況説明が冗長で誤解・誤読が相次いだこと、学生が解答として解釈しうる範囲が広すぎたこと、その一方で評価用ルーブリックを用いて評価可能な解答の範囲が限られていたことが挙げられた。

キーワード：メディア情報リテラシー、大学生、パフォーマンス評価、ルーブリック、SNS

Keywords: Media and Information Literacy, University Student, Performance Assessment, Rubric, SNS

1. 背景と目的

近年は SNS 等の発展に伴い、誰でも容易に情報を発信・拡散できるようになっている。このような社会においては、氾濫する情報の信頼性を評価するとともに、適切に情報を発信する能力の育成が求められている。そのような能力として、メディア情報リテラシー（MIL）の重要性が提唱されている（坂本, 2014）。

MIL とは「個人的、職業的、そして社会的活動に参加するために、さまざまなツールを使って、批判的・倫理的・効果的な方法で、市民があらゆるフォーマットの情報やメディアコンテンツにアクセス・探索・理解・評価・利用・創造・共有することができるようになるための一連の能力」（UNESCO, 2013）と定義されている。このように、MIL は情報社会に生きる市民・社会人として不可欠であり、大学における MIL 教育は重要と言える。

現在、MIL の評価枠組みが作成され（UNESCO, 2013）、各国で MIL 教育を計画・推進するための診断的評価が

促されている。したがって、日本でも今後の MIL 教育に向けた診断的評価の開発と実施が求められる。

また置かれた状況や対処すべき課題によって、MIL に必要な能力は異なるとされている（Moeller, Joseph, Lau, & Carbo, 2011）ため、MIL の診断的評価に際しては、より現実での課題解決に近い形で評価を行えるパフォーマンス評価の開発が望ましい。そこで本研究では、大学生に向けた MIL のパフォーマンス評価の開発と実践を行い、今後の MIL の評価への示唆を得ることを試みる。

2. パフォーマンス評価の開発

本研究では、パフォーマンス評価における評価者・被評価者双方の負担を軽減しつつ、課題の真正性を高めることをねらいとして、特定の状況が提示され、その場合に自分が取る行動およびその理由をそれぞれ自由記述するという課題を作成した。評価の焦点としては、行動と理由の両方を合わせて一つの解答とみなし、提示された状況下におい

て望ましいと考えられる行動を取るという発想に至れるか、およびその理由を意識できているかどうかをルーブリックで評価することとした。

パフォーマンス評価およびルーブリックの作成にあたっては現在の情報環境を踏まえ、UNESCO（2013）から特に重要と思われる4つの観点を抽出し¹、1問につきそれぞれ1～2の観点を評価する課題を作成した。抽出した4つの観点は表1の通りである。

表1 本研究での評価観点

観点名	UNESCO（2013）による説明
情報の評価	収集した情報やメディア・コンテンツ、情報源や発信者について評価・真正性の確認を行う
コミュニケーション	適切なツールを用いて、合法的・倫理的・効果的に情報やメディア・コンテンツ、知識をやりとりする
社会的な行動への参加	自己表現・異文化間対話・民主的な参加のために倫理的・効果的・効率的にメディアや情報の発信者に関わる
モニタリング	創造・発信した情報やメディア・コンテンツ、知識の影響をモニタリングする

作成した課題については、大学生への試行を通じて修正を行うとともに、解答結果を参照してルーブリックにおける各レベルと記述文の作成を行った。その結果、3つのパフォーマンス課題とルーブリックを作成した。

3. 開発した課題の概要

本研究で開発した課題は、図1に示すように「京都の産業『緑茶』について調べる」というグループ学習の中で、以下のSNSに関連した3つの課題に遭遇するというストーリー仕立てとなっている。また、SNSを普段利用しない学生を考慮し、グループ学習のために専用のSNSを利用できる

という設定を付け加えた。

3.1. 課題1「情報の評価」「コミュニケーション」

この課題では「グループ学習用の資料を探索中に、興味深いが真偽が明確ではないネットニュースを発見した」という状況を設定し、「情報の評価」として1) ニュースの真偽を確認する行動を取れるかどうか、および「コミュニケーション」として2) ニュースをメンバーに伝えるために適切な行動を取れるかどうかの2つの観点を評価するため、それぞれについてどのような行動を取るかを理由とともに記述することを求めた。2つの観点についての評価用ルーブリックを表2に示す。また評価の際の参考とするため、記述文だけでなく各レベルにおける具体的な解答例を作成した。なお、これらの解答例は他の課題でも同様に作成したが、紙幅の

表2 課題1の評価用ルーブリック

「情報の評価」		
レベル3	レベル2	レベル1
直接真偽が判断できる情報を確認する	真偽を検討しようとしているが不完全な方法である	情報を共有する前に真偽の判断の必要性に思い至らない
(解答例) ・実施した機関を調べる ・類似した研究を調べる	(解答例) ・他のニュースと比較する ・実際に試す	(解答例) ・何もしない ・友人に共有してから真偽を話し合う

「コミュニケーション」		
レベル3	レベル2	レベル1
基準1、2の両方を満たす	基準1、2のどちらかを満たす	基準1、2の両方とも満たしていない
基準1：不確実な情報を多数に拡散しないように意図した行動を取る (解答例) ・不特定多数の人に拡散しないようにするためグループSNSを利用する 基準2：受け取った側がニュースを自身で検証できるような方法を採用 (解答例) ・送信する際に記事のURLを記載する		

第2回目授業の前日、自宅にて・・・

- あなたは、翌日のグループ学習の時間に向けて、緑茶についての最新のニュースを調べることにしました。
- インターネットで調べていたところ、あやしいネットニュースを見つけました。
- ちょっと読んでみたところなんとなく面白そうだし、次回の授業にむけて、とりあえずみんなに共有してもいいのではと思いました。

<話題のニュース>

「受験生必見！科学で証明、お茶とヨーグルトの最新効果」

緑茶に含まれる「カテキン」と、「腸内フローラ」に注目が集まる中、ヨーグルト200gに粉末状の緑茶5gを加え、50回混ぜると新しい分子結合が生み出され、記憶力が向上するという効果が発見された。

京都理化学研究所（京都府京都市吉田下阿津町1-1-2）は、12月4日(月)、お茶とヨーグルトを混ぜることで脳の活性化を促す物質が生成される発見を発表した。



同研究所は、2012年から宇治茶健康協会（京都府宇治市池田番谷町3-1-4）と、「宇治茶健康増進利用プロジェクト」として共同研究を行っている。これまで、両プロジェクトでは緑茶のカテキンとヨーグルトの効果といった成果を発表してきたが、今回の研究報告もその1つである。

同研究所の永野主席研究員は、今回の発見について、偶然が生み出した結果だという。「両者が、カテキンが身体に良いという新聞記事を見て、たまたまヨーグルトと緑茶をよく混ぜて食べた後が活発な気がする、と言ったことが研究のきっかけでした。」と語る。

50回混ぜることで、腸での吸収力が上がり、腸内フローラが改善される。その結果、神経細胞を活性化され、情報伝達を効率化し、記憶力が向上する効果が見られた。仕事や受験勉強で忙しい人たちは、嬉しい発見である。同研究所では、今後、認知症予防の効果なども検討していく予定だとのことである。

Epigallocatechin (EGC)
Epigallocatechin (EGC)
Epigallocatechin-3-gallate (EGCG)
Epigallocatechin-3-gallate (EGCG)

・このニュースを読み終えたあと、あなたならどのような行動を取りますか。あなたならどのような行動をとるか考え、**具体的にかつ詳細に**書いてください。

・上記の行動を選んだ理由を教えてください。

・他のメンバーに伝えるために、どのような行動をとりますか。SNSを使用する場合、**使用するSNSを具体的に**書いてください。

・上記の行動を選んだ理由を教えてください。

図1 開発したパフォーマンス課題（課題1）

都合上、本論文に記載するのは課題1のみとした。

3.2. 課題2「社会的な行動への参加」

課題2では「グループで学外見学に出かけた際、スマートフォンで使用していた地図アプリの不具合で、目的地が実際の場所とは違う場所が表示されていた」という状況を設定した。この課題では「社会的な行動への参加」の観点について、地図アプリの不具合を自分だけの問題と捉えず、積極的に他者や社会に働きかけ改善に向けて適切な行動を取れるかどうかの評価を試みた。課題2の評価用ルーブリックは表3の通りである。

表3 課題2の評価用ルーブリック
「社会的な活動への参加」

レベル3	レベル2	レベル1
自分だけの問題ではないと捉えて、アプリの開発会社に不具合を報告する	自分だけの問題ではないと捉えるが、最善の方法を採れていない	何もしない、あるいは自分だけの問題ではないと認識できていない

3.3. 課題3「モニタリング」

課題3は「モニタリング」の観点进行评估するため、「見学からの徒歩での帰りに鉄道事故現場に遭遇し、SNS上では事故のせいで電車が動かなくなったため、友人を含めた多くの人が情報を求めている」という状況を設定し、プライバシーの問題や自分が発信する情報が与える影響を考慮して、事故の現場を写真に撮るかどうか、情報を必要な範囲に発信できるかを評価する課題とした。この課題では、まず現場の写真を撮影するかどうかを2択で尋ねた後、その後どのような行動を取るか、およびその理由を自由記述形式で尋ねた。課題3の評価用ルーブリックは表4の通りである。なお、写真を撮るかどうかでその後の行動が分かると想定したため、ルーブリックにおいても「写真を撮る」「写真を撮らない」場合でルーブリックが分かれているが、実際の評価の際は両者を分けずにまとめた評価結果とした。

表4 課題3の評価用ルーブリック
「モニタリング」

「写真を撮る」場合

レベル3	レベル2	レベル1
該当無し（プライバシーへ配慮し、写真を撮影すること自体良くないことであると考えている）	プライバシーに配慮しつつも、写真を不特定多数に拡散する 拡散はしないが、後で役に立つかもしれないと思い写真を撮る	プライバシーに配慮せず、写真を不特定多数に拡散する

「写真を撮らない」場合

レベル3	レベル2	レベル1
不特定多数への情報発信の影響を認識し、友人のみに情報を伝える	友人のみに情報を伝えるが、情報発信の影響を認識していない 情報提供目的で不特定多数に発信する	何もしない 意図なく不特定多数に発信する

また「写真を撮る」場合のレベル3については、プライバシーへの配慮という観点を踏まえると、拡散目的でなくても写真を撮ることを控えることが望ましいと考え、該当なしとした。

4. 学生への実施およびその結果

4.1. 実施方法

開発したパフォーマンス評価について、学生の解答結果を通じた検討を行うため、2018年1月に大阪府内の私立大学の2～4年生（ $n = 154$ ）に対して、期末試験終了後、紙に印刷された課題に筆記する形式で一斉に課題を実施した。一部の学生は試験を途中退席したため、課題を配布し、解答を所定の場所に提出することを求めた。

評価にあたっては、あらかじめ実際の解答結果を用いてキャリブレーションを行い、評価規準のすりあわせを行った後、課題ごとに筆者らのうち2名が1人の解答結果をルーブリックで評価した。両者の一致したレベルを最終結果とし、両者の評価が一致しない場合は、3人目の評価者が評価を行い、その結果に近い方を最終結果とした。他方、解答がルーブリックで評価できない場合は、その解答（以下、欠損解答と記す）を別に集計し、解答結果とは別に検討を行うこととした。

4.2. 解答結果の検討

それぞれの課題についての学生の解答をレベルごとに集計した結果を図2に示す。その結果、いずれの課題においてもレベル3の解答が少なく、特に課題1の「コミュニケーション」を問う課題では2名、課題3では3名にとどまった。またいずれの課題においても、解答全体の3分の2がレベル1にとどまっていることが明らかになった。その原因として「何もしない」という解答が多く見られたこと、特に課題2・3では評価観点である「社会的な行動への参加」「モニタリング」と直接関係のない行動が非常に多く、これらも「何もしない」と同じとみなし、レベル1として評価したことが挙げられる。

また欠損解答については、課題1の「情報の評価」を問う課題を除く3つの課題に多く見られるとともに、特に課

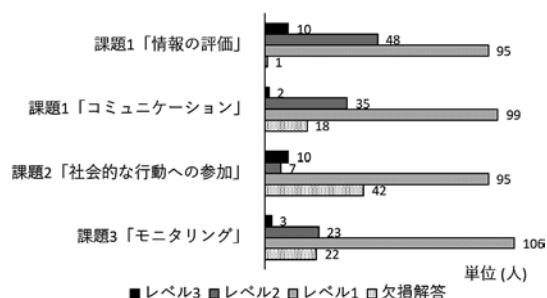


図2 課題ごとの学生の解答結果

題2において顕著であった。これらの欠損解答は、以下の3種類に大別できる。

第一は、課題の状況設定を誤解している解答である。具体的には、課題2においてすでに当初の目的地には到達しているという説明文があったものの、「目的地への行き方を人に尋ねる」といった解答が多く見られた。また課題3においては、鉄道事故を目撃したものと状況設定がなされていたにもかかわらず、自分も事故に巻き込まれていると誤解していると考えられる解答があった。

第二は、課題へ取り組む意欲が低いと思われる解答である。例として、課題1では「情報の評価」「コミュニケーション」双方の課題に「面倒なので何もしない」という解答があった。また課題2・3では、レベル1に該当する「何もしない」という解答が多数見られたが、これも解答への意欲の低さとの関連が考えられる。

さらには、筆者らが想定していなかった行動を記述したため、ループリックで評価できなかった解答があった。その例としては、課題1の「コミュニケーション」の課題における「SNSを使わず直接口頭で伝える」といった解答や、課題2での「地図アプリを再インストールする」、課題3における「事故の救助活動を手伝う」等があった。

5. 考察

以上のように、本研究で開発したパフォーマンス評価を実施した結果、ほとんどの解答がレベル1にとどまったほか、筆者らの想定とは異なる解答例も多く見られた。

その要因として、第一に説明の冗長さが挙げられる。すなわち本研究では課題において詳細な状況を設定したが、その説明をほぼ文章のみで行い、解答に重要な部分を簡潔に説明し、理解し易くする工夫（例：太字、下線、図表の利用等）が不足していたことが考えられる。本研究では、説明文の見落としや誤読、あるいは意欲の低下に起因すると思われるレベル1や欠損解答が課題2以降に増加していた。この要因として、説明文が冗長で理解するための負担が大きく、課題が進むにつれて学生の集中力や意欲の低下が促された可能性が推測される。

加えて期末試験後に、試験内容とは関係のない能力の評価課題を実施したことによって、学生の動機付けや意欲を高めにくかったことも挙げられる。

また、課題では提示された状況に対して「自分ならどうするか」という形の教示文となっていたことで、解答として解釈されうる行動の幅が広くなり、MILに関連しない解答が多数に上ったと考えられる。同時に、学生の自発的な行動を評価する意図から、課題のタイトルを除き、あえてSNS等MILに関する記述を行わなかったことも、MILに関係ない

解答が増えた要因と言える。

さらには、ループリックの問題が挙げられる。今回開発したループリックでは、評価できる解答の範囲がそれほど多くなかった。加えて、評価観点に無関係な行動を「何もしない」と同じものと見なしたため、「何もしない」あるいは評価観点とは関係のない行動を記述し、レベル1と評価された解答が非常に多くなった。

6. 今後の課題

今後の課題としては、以下の2点が挙げられる。

第一は、より状況設定を簡潔かつ正しく理解できるような課題のデザインを行うことである。すなわち、場面設定や問いの意図を明確にするとともに、評価の目的であるMIL、とりわけSNS等を利用した情報に関わる課題であることを意識させる必要がある。また、状況説明や教示文についても、文章だけでなく図表等を用いて、冗長となることを防ぐ等の工夫も求められる。

第二には、さらなるループリックの改善が挙げられる。すなわち、まず評価可能な解答の幅を広げることが必要である。同時に、レベル1の解答が増加する原因となった「何もしない」という解答について、「何もしない」という解答とレベル2の解答との間に、さらに何らかの行動を取るという段階を設けて、間にあるMILの質的差異を把握できるものにする必要がある。そのためには、学生がどのようにSNSを利用しているか等の情報活用行動についても、より詳細な把握が求められる。

注

¹ 観点の名称については、UNESCO (2013) の説明にもとづき、筆者らの側で独自に設定した。

引用文献

- Moeller, S., Joseph, A., Lau, J., & Carbo, T. (2011). *Towards media and information literacy indicators*. (<https://www.ifla.org/publications/towards-media-and-information-literacy-indicators?og=81>) (2018年8月31日)
- 坂本 旬 (2014). 『メディア情報教育学：異文化対話のリテラシー』 法政大学出版局.
- UNESCO (2013). *Global media and information literacy assessment framework: country readiness and competencies*. (<http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/resources/publications-and-communication-materials/publications/full-list/global-media-and-information-literacy-assessment-framework/>) (2018年8月31日)